論文

棒読みからの脱却
—英語アナウンス指導の実例から—

花　田　恵　吉
（日本放送協会）

1．はじめに

日本人が英語によるスピーチをする（原稿を読む）際、「棒読み」と批判されることがよくある。特に政府の要人などが英語でスピーチをする場合は、メディアなどの注目度も高いためか、しばしばそうした批判が報道される。最近でも海外生活経験のある日本の首相（当時）が英語でスピーチをした際に、メディアなどで同様な批判が出ていた[1)]。

日本人は義務教育で英語を学び、さらに高等教育でも学び、年数的には相当長期にわたり勉強しているのだが、こと、英語を音読するという場合、一般的に言って、どうしてもその読みはおぼつかないものになりがちなようである。

筆者はNHKの海外向け英語放送にアナウンサーとして携わっている。英語アナウンサー志望者やリポーターなどの指導にあたるうち、ある種のポイントを押さえれば、「読み」はずいぶんと改善されることが体験的にわかってきた。そこで、本稿では、Prosody に関するいくつかの簡単な指導で「読み」が大きく変化するという仮説に基づき、数種の指導法を紹介し、実際のアナウンス指導例をとりあげながら、それを検証する。英語教育に関わっている方々の何らかのヒントになれば幸いである。なお、本稿で「読み」と記したものは原則「音読」のことである。

2．音声指導をとりまく現状

筆者は現在の仕事に就く前、中学校や高校で英語の教員をしていたことがある。典型的な授業の風景として、一人一人を指名して教科書を読ませるというのがあるが、その際に聞いた彼らのリーディングは、その多くが一様に訥々としたものだったが、同時にいくつかのパターンがあるように感じられた。現在指導されている方々も同様に感じられるのではないだろうか。

ちなみに本稿のタイトルにあげた「棒読み」であるが、辞書などの定義では「文章を抑揚や区切りをつけずに読むこと」（新村，2008：p.2572）とある。教室で聞いた英語はまさにその言葉にピッタリする読みだった。

さて、英語アナウンサーの志望者というのは、日本人の場合、英語習得のバックグラウンドで見ると、いわゆる帰国子女と呼ばれる子供の頃に海外滞在経験のある者と、そうでない者とに分けることができる。帰国子女と言っても、生まれたときから海外で生活し、就職とともに日本に来た者から、小学生くらいの年齢時に数年間海外で滞在していた者など、そのバックグラウンドは多様である。また帰国子女でない場合でも、高校生や大学生の時に留学経験のある者もいれば、全く海外生活経験がない者もいる。この中で後者、つまり幼い頃に海外生活経験のない者の場合、その多くは日本国内で通常の英語教育を受け

ており、その英語レベルは非常に高いものの、英語の読みに関しては先に述べた「教室の棒読み」の特徴を備えていることが多い。英語の運用能力と読みの能力は別だとも言える。この背景にあるのはLennebergなどのいわゆる「臨界期」の問題（Lenneberg, 1967）かもしれないが、本稿では触れない。

2.1 音声指導における2つの要素

NHKの英語アナウンサーＯＢで、後に日本大学で教鞭を執った水庭進は、その1997年の著書の中でこう述べている。

> 「個々の音というのは、軍隊用語を遣うのはいささか憚るが、言わば各個教練のようなものである。各個教練はもとより大切だが、それにもまして大切なのは各個教練で習得した基礎知識を応用に移す、分隊、中隊、大隊教練である。Connected speech又はspeech-flowと呼ばれるものがそれである。」
>
> （水庭，1997：p.183）

水庭に筆者が直接聞いたところによると、この言葉は元々、彼の恩師であり、後に早稲田大学の教壇に立った五十嵐新次郎が口にしていたものだという。

各個教練は一つ一つの音（発音）に関する指導。そして、分隊、中隊、大隊訓練は単語レベルからセンテンスレベル、あるいはもっと大きなレベルでの音に関する（IntonationやStress、Rhythmなどの）指導ということになる。後者はProsodyと呼ばれる。

2.2 現状の英語教育でのProsodyの扱い

日本の英語教育において、音声指導でこの二つの要素はどう扱われているだろうか。個々の発音に関しては一通り指導しても、Prosodyについてはなかなか扱うことのできないのが実情ではないだろうか。筆者の学校指導での経験でも、thの発音の仕方やｒとｌの発音の違いなどは教えても、Prosodyに関わる事柄、例えば語と語のリンケージやIntonationについては、軽く触れるのが時間的に精一杯だったように思う。そうこうしているうちに文法に進まざるを得ないというのが、一般的な状況ではないだろうか。つまり、Prosodyに十分な時間を注げないのである。

一方、個々の発音とProsodyについて、前述の水庭は、どちらも重要なのはもちろんだが、あえてどちらがより重要かと問われれば、Prosodyがより重要ではないかという。彼は筆者に「各個教練がたとえ多少悪くとも、全体教練がうまく行っていれば、コミュニケーションはスムーズにできる。だが、その逆は難しい」と語ったことがある。

野中（2005）は英語の音声指導において、「いっそのことProsodyから始めたら？」と日本の英語教育では斬新ともいえる提言を行い、Prosody指導の重要性を強調している。また、このProsody指導がおろそかになりがちなのは、日本だけの問題でもないようで、Wells（2006）もIntonationについて次のように述べている。

> "Every learner of English should be taught to make the *th-* sounds of *thick* and *this*, the vowel sound of *nurse*, and the differences in sound between *leave* and *live*, *bet* and *bat*. Most learners also learn about word stress. They know *happy* is stressed on the first syllable, but *regret* on the second. But intonation (also known

as **prosody** or **suprasegmentals**) is mostly neglected. The teacher fails to teach it, and the learner fails to learn it. (Wells, 2006: p.2)

「訥々」とした「棒読み」は、Prosodyの基本的な知識と技術が欠如しているために、英語特有のフローが阻害されて起きているのではないかと筆者は思う。Wellsの言うように、ともすれば軽視されがちなProsodyであるが、指導者、学習者ともに気にかければ、少しでも「棒読み」を減らすことができるのではないだろうか。そして、それは日頃ほとんど指導されていないだけに、逆に、ちょっとした技術の伝授で、大きく「読み」を変える可能性があるのではないだろうか。

3.「棒読み」と呼ばれる読みの3つのパターン

「棒読み」からの脱却のためには、まず「棒読み」そのものを詳細に見ていく必要がある。前述のように、筆者は英語教員だった時代、そしてアナウンサーとなって以降も様々な日本人の「読み」を聞いてきたし、また、その上で指導をするという機会が多くあった。そして、実際に耳にした数多くの読みから、「棒読み」と呼ばれるような「読み」方に、いくつかのパターンがあることがわかってきた。ここではまず、その中から3つのパターンを紹介し、またその原因も考察したい。

3.1 ブツ切れ読み

まず最も多く聴いたパターンとしては、単語と単語の間に切れ目の入るような読みである。これを「ブツ切れ読み」と筆者は名付けている。スパゲティ・ナポリタンを調理するつもりが、茹で上げた麺を炒めすぎたために、短く切れてマカロニかペンネのようになってしまったような印象である。これには様々な原因があるが、声門閉鎖が一つの大きな要素であるように思う。高倉は次のような例を挙げてその不自然さを示している。

> 「一つ例を挙げますと、数年前のアメリカ映画で Once upon a time in America というのがありました。日本の配給元では題名を敢えて訳さず、そのまま一語一語カナにしてワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカとしました。さて、原語を学生諸君に読んでもらいますと、半数以上の人が、・のところで声を止めるのです。声を止めるというのは、のどを一度閉じることです。軽い咳の真似をすると、ノドがアッ、アッと聞こえるような音を発するでしょう。これがノドツメ音（glottal stop ＝喉頭閉鎖音）というものです。これは、英語の発音に不要なものです。」
>
> （高倉，2003：p.89），

私も以前、英文科の学生、数十名にニュース原稿を読んでもらったことがあるが、やはり声門閉鎖が多く見られた。＜文例１＞はその時の一人の学生の例である。センテンス中、／の印を入れた場所に、声門閉鎖およびリンケージの欠如が見られ、そのために読みがブツ切れになっていた。

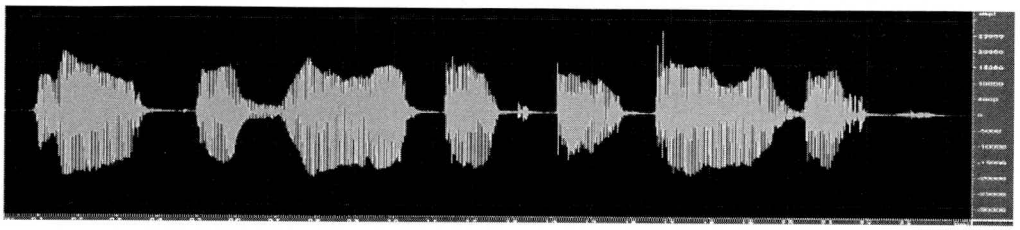
＜文例１＞

Mr. Bush told news agencies / on Wednesday / that he hopes / that / the six party talks / will resume / at / an / early date.

特に最後の at an early date の部分をその時の録音から音声波形グラフにしてみると＜グラフ１＞となる。なお、本稿でとりあげたグラフのオリジナル音声は、すべて以下のインターネット・サイトにアップロードしてあるので実際に聞くことができる。

http://hompage2.nifty.com/kaykay/papers/reading.htm

＜グラフ１＞



“will resume at an early date”

見事に単語１語ごとに声門閉鎖によると思われるストップがかかっていることがわかる。

また、松坂（1986）は、日本人の発話では、文尾において下降調Intonationが最後に降りきらない内に、声門閉鎖で止まってしまうということを挙げている。これも、ブツ切れの印象を与える要素となっている。

「④下降調では、自分の声域のもっとも下まできちんと声をおろすこと．日本人は，降りきらぬうちに声門閉鎖により発話をとめてしまいがちである．」

（松坂，1986：p.176）

3.2 のこぎり読み

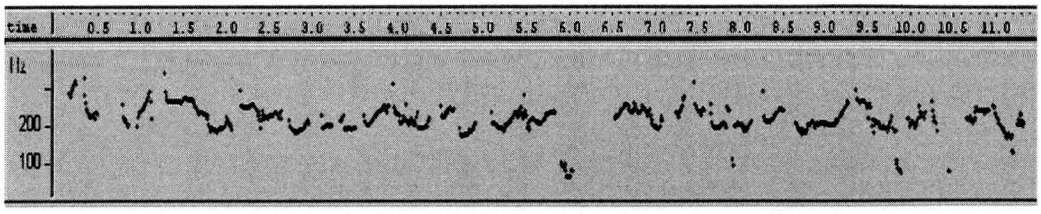
次にIntonationにかかわるパターンとして、一定の幅のピッチを同じ間隔で上昇下降を繰り返すという読みがある。これを筆者は「のこぎり読み」と名付けている。のこぎりの歯のように、同じ幅のギザギザを行ったり来たりしているだけの読みである。それ以外の変化がなく、まさに「棒読み」である。

この原因としては、Intonationの基本的な知識が欠けていることが考えられる。たとえば次のセンテンスを読んだ例の場合、通常ピッチが少しずつ変化しながらも全体を見ると穏やかに下降していくのが本来であるが、この学生の例では、下の基本周波数グラフのように、ピッチが同じパターンで上下に変化しているだけであり、最後になってやっと下降する。

＜文例２＞

He said that North Korean leader Kim Jon-Il has been trying to divide countries involved in the talks and he hopes Mr. Kim understands the determination of the other parties.

＜グラフ２＞



He said…　　and he hopes. . .

3.3 マシンガン読み

もう一つ、多く見られる例として、すべての音を等分の強さで読んでしまうパターンがある。しかも早口のケースも多い。ちょうど、同じ大きさの弾が同じリズムで、休むことなく撃ち続けられるような様子から、これを筆者は「マシンガン読み」と名付けている。

この原因としては、まず英語のWeak FormあるいはWeakeningの欠落があげられる。ストレスを置かないシラブルや単語の発音が、ストレスを置いたときと異なるという英語特有のWeak Formは、日本語にはあまり見られないせいか、意識して身につけなければ習得できない。この点、英語教育では扱われることが少ないせいか、日本人の発話にはWeak Formを全く用いない例も多く見られる。逆に言えば、Weak Formさえ身につければ、ずいぶん読みの印象が変わるはずである。

また早口に関しては、心理的に「早く終わらせたい！」という気持ちもあるのかもしれない。「もっとゆっくりと読もう！」と提案すると、とたんに自信を喪失して読めなくなってしまう例を見ても、そうではないかと察せられる。

また、このWeak Formに関しては、アナウンサーならではの興味深い現象がある。NHKにおいて、日本語のアナウンサーが人事異動で英語のアナウンサーとなる例は比較的多い。最近では、日本語のアナウンサーも子供の頃に海外で生活した経験を持つ人が増え、高度の英語力を持つことが多いためだ。だが、日本語のアナウンサーとして訓練を受けた故に苦労するのが、このWeak Formである。

日本語ではWeak Formはあまり見られない。逆に日本語のアナウンサーは、各音をしっかりと出すことを日々要求され訓練される。すべての音の粒がそろって明快に発音される。それが人々の日本語アナウンサーの発話に対するイメージであろう。つまり、すべての音をきちんと出すクセが、普通の日本人以上に身に付いてしまっているのだ。ところが、それが英語の音読にも影響が出て、最初のうちはWeak Formを必要以上に強く、場合によってはStrong Formとして読んでしまう傾向が出てしまう。いったん身につけたものを消し去るのは大変な苦行である。最初のうちは、皆、その改善にひどく苦労し、それをようやく乗り越えて、英語アナウンサーとして大成している。

4　3つの読みに対する具体的な矯正方法

さて、では実際に上記の問題点を克服するためには、どんな指導が考えられるだろうか？ここでは、今まで経験した英語アナウンスの指導方法から、具体的な矯正方法をいくつかあげてみる。

4.1 矯正方法 1　音の連結の習得

ブツ切れ読みに対する指導としては、まず音の連結の訓練があげられる。そのために有効な方法としては、以前からよく知られているものに、ハイディ矢野の提唱した方法がある（矢野，1979：68）。例えば「Not at all.」という三語を連結させるために、日本語の「奈良ロール」という言葉を発音させるというやり方である。これは手軽でありながら確実に効果をもたらす便利な方法だ。そして、容易さ、声門閉鎖を自然と無意識に禁止させているという点で優れている。

Not、at、allと三語の間に声門閉鎖を入れてしまうのを防ぐために「奈良ロール」という架空のお菓子(寿司？)を作り出し、一つのutteranceとして発声させているというのが、大きなポイントである。「奈良ロール」という言葉を作らなくとも、たとえばまず / ɑəɑ: / と連続にとぎれなく発声させてみて、その後に、同じピッチ、同じ長さで子音を加え、「Not at all.」と言わせてみるという簡単な指導でも同様の効果が得られるし、そうした方法を英語指導でも加えてみてはどうだろうか。ちなみに「奈良ロール」ではアメリカ式の発音になり、イギリス式の発音の指導には困るという場合は、言葉を変えて、たとえば「野太徹（のたとおる）」という架空の人名に置き換えても良い。

また、高倉（2003：p89）は、三文字のacronymを使ったリエゾンの練習を勧めている。これも簡単に行えて有効な方法である。たとえば、アルファベットをその発音の特徴からいくつかのグループに分けて、それぞれから１文字ずつ抽出して組み合わせたacronymの発音を練習するというものである。

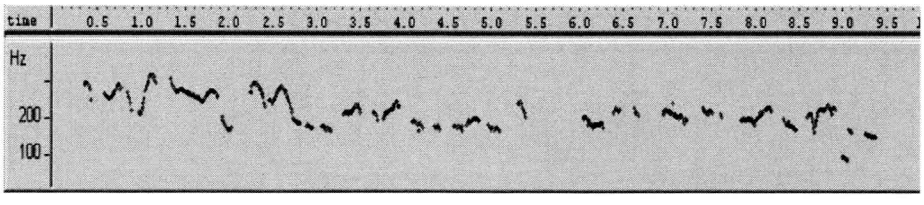
SFX / esefeks / や NHL / eneitʃel / など、確かに日本人はそれぞれの文字の間に声門閉鎖を入れ、/ es / ef / eks / や / en / eitʃ/ el / と発音しがちであり、それを矯正することでリエゾンの特徴をつかみやすくなる。単語のつながりではなくアルファベットのつながりということで、わざわざ文例を用意せずとも、手軽に、そして、誰でもすぐに思い立ったら実行できる優れた方法である。

4.2 矯正方法 2　Intonation の習得

Intonationの基本としてまずはFalling Intonationを学習者に身につけさせることが大切である。ちなみに我々の仕事について言えば、英語アナウンサーの仕事は、基本的にニュースを読むことが多く、殆どのセンテンスはFalling Intonationである。実はこの習得を徹底すれば、それだけで、のこぎり読みを防ぐことができる。

上記＜文例２＞のセンテンスだが、これを通常のFalling Intonationで、プロのアナウンサーが読むと、以下のグラフのようになる。

＜グラフ３＞



He said that. . .　　and he hopes. . .

ご覧のように＜グラフ２＞とは違い、強調すべき単語でピッチが上がっているが、全体としては徐々にピッチが下降していくのがわかる。

これを１対１で向かい合って理解させ、まねさせることによって身につけさせる。ルールを理屈で覚えるだけではだめなのだ。小さな子供が言葉を覚えるように、繰り返し、真似ること。これ以外に方法はなく、Roach（2000）にも同様の説明がある。

> The only really efficient way to learn to *use* the intonation of a language is the way a child acquires the intonation of its first language, and the training referred to above should help the adult learner of English to acquire English intonation in a similar (though much slower) way - through listening to and talking to English speakers. (Roach, 2000：p.153)

指導者の後につけて反復させるという方法もあるし、通訳訓練で昔から用いられてきたシャドーイング（特にプロソディ・シャドーイング）により練習させることも効果的な場合がある（門田2007）。また、こうしたシャドーイングの練習教材も最近では様々に出ており、それを活用するのも良い（例：鳥飼他2003）。

筆者自身もかつてアナウンスの訓練を受けた際、先輩である水庭よりIntonationの練習としてPalmer（1924）を与えられ、一文一文を繰り返し読んで身につけるように要求された。ただ、Roach（2000）も言っているが、人によってはIntonationを身につけるのに相当苦労する人もいることは確かだ。

> As explained above, some students may be perfectly well able to discriminate between tones, but have difficulty in labelling them as 'fall', 'rise', etc. I find that about five per cent of the students I teach are never able to overcome this difficulty (even though they may have perfect hearing and in some cases a high level of linguistic and musical ability). (Roach, 2000：p.160)

５パーセントという数値がどうかは自分にはわからないが、いずれにしても個人差があるのは確かだ。ベテランのアナウンサーが若いアナウンサー志望者たちの訓練をして、「英語の運用能力が非常に高い人でも、どんなに指導してもどうしてもダメだという人が、実はいるんですよねぇ…」と話していたことがある。だが、圧倒的多数の人は、時間を重ねれば、たとえアナウンサーにはならなくとも、基本的なポイントについては絶対に身につけることができる。

もう一つ、逆に学習者の立場から大切なことを加えれば、自己訓練は大切だが、自分の読みを客観的に判断する指導者を置くことは、上達のための絶対条件である。自分自身の読みを録音して聞いたとしても、それを自分で客観的に判断するのは難しい。「うまくコピーできた！」と思っていても、そうでないというのは、我々がアナウンス研修でよく体験することである。カラオケで上手に歌えたと自分で思っても、他人が聞けば「全然ダメだ」と言うのと同じである。

4.3 矯正方法３　Weak Formの習得

先に述べた日本語アナウンサーの例をとっても、日本語の発話はいかに個々の音をはっ

きりと出すかがポイントになる。一つ一つの音、それぞれのシラブルの粒がきれいに揃っているというイメージである。しかし英語の場合は前述の通り、強い音と弱い音が生じる。Strong FormとWeak Formである。この二つを使い分けることにより英語らしいリズムが生まれてくるが、日本人の場合、Weak Formを強めてしまい、すべての音をStrong Formとしてしまいがちである。それが「マシンガン読み」となるわけであり、いわゆる日本人英語と言われる「棒読み」の大きな要素となっている。

このWeak Formの習得の大切さは、音声学の分野では相当以前から主張されている。そのため、英語音声学の分野には様々な教材が揃っている。例えば、英語アナウンサーの研修教材として以前から伝わるものの一つにPring（1959：p.35）がある。

5．実例とその分析

では実際に訓練によってどのように読みが変化するのか。一つの例を見てみたい。Aさん。30代前半の男性である。英語アナウンスに興味があり我々の訓練を受けた。海外生活経験はないが、その英語運用能力はきわめて高いものであった。

5.1　最初の状態

訓練の前に、まず試しにニュース原稿を読んでもらった。声は非常に良く通り、個々の発音も明快である。が、全体の印象としてフローが悪く、また、すべてをStrong Formで発音しているという日本人にありがちな英語の特徴を持っていた。

上記３つの特徴で言えば、音の連結はできているが、IntonationとWeak Formに難があるというのがその見立てであった。筆者の言葉で言えば「のこぎり読み」と「マシンガン読み」を兼ね備えていることになる。

5.2　指導の内容

そこでNHK・ＯＢの英語アナウンサー、矢口堅三が指導にあたった。彼が最初に問題と感じた点は、我々が最初に感じたことと全く一緒であった。まず、「文章の音声処理の根本、最初の強調音節が最も高い声のレベルで発音され、徐々に声は下降線をたどり、次の強調音節が最初のそれより少し低いレベルで発音され、以下、文尾に至る」（研修報告メモより）という基本ができていないと指摘。つまり、Falling Intonationの基本ができていないということが大きな問題点だとした。

もう一つ、「Weak formsになじみが薄いため、どうしても“weak”に発音できず、stressが分散してしまい、平板なリズムになる。これは、いわゆるweak formsだけでなく、２音節以上の普通の単語でも見られるので、全般に「間延び」した印象を与える」（同じく研修報告メモより）と指摘。そこで矢口の課した課題は２つ。Falling Intonationの習得とWeak Formの習得である。

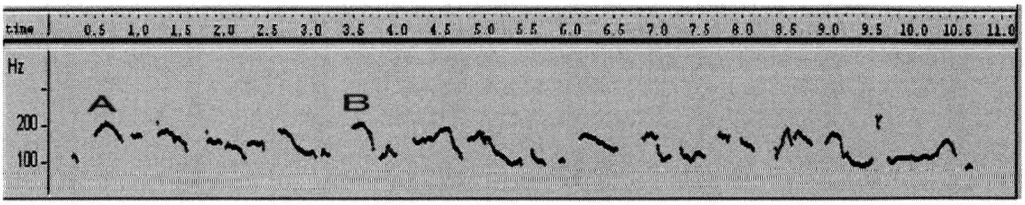
5.2.1　Intonationの習得＆徹底

例えば次のセンテンス。

＜文例３＞

The Foreign Correspondents Club in Beijing has accused the Chinese government of defying its promise of respecting media freedom during the Olympics.

＜グラフ４＞



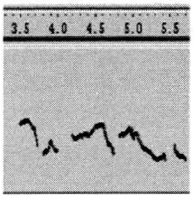
The Foreign. . . accused the. . .

ある特定の範囲のピッチ内をのこぎりの歯のように忙しく上下していることがわかる。たくさんの小山ができている。そしてセンテンス全体のIntonationも、ゆるやかな下降線をたどっているとは言い難い。

まずはFalling Intonationを口伝えに繰り返し練習させた。さらに、文章の一部をとってみても、同様のピッチが下降しない問題がある。例えば、グラフの中、Ａの部分「The foreign correspondent club in Beijing」は名詞が並んだ連語であるが、すべての単語においてアクセントが置かれているため５つの小山が連なって見える。

Ｂの部分、「...accused the Chinese government」もまた３つの同じような大きさの山ができていることがわかる。「accused」「Chinese」「government」それぞれのアクセント部分が頂上となる３つのコブができあがるのだ。Ｂの部分を切り出してみよう。

＜グラフ５＞

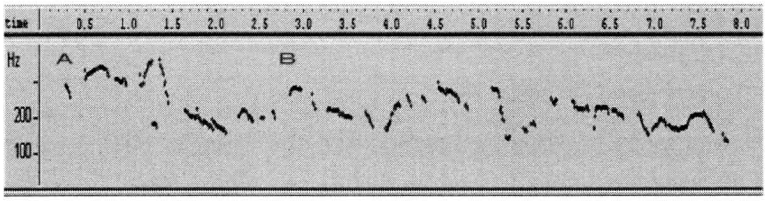


“accused
the Chinese
government”

これも大きな特徴で、日本人の英語学習者によく見られるのだが、「動詞＋目的語」の場合もそれぞれに強調を置いてしまい、あたかもいくつもの頂上が連なる山並みができるようになっている。そして目的語は連語であるが、これもＡ同様、それぞれ一つの単語ごとに山ができてしまう。

たとえば、同じセンテンスをベテランのアナウンサーが読むと、次のようなグラフになる。全体に山はなだらかであり、Ａの部分は途中に１つのピークを作りながらも全体としてみると一つの山が下っていく。Ｂの部分も３つの山が完全独立したピークになっておらず、全体で一つのゆるやかな下降になっていることがわかる。またセンテンス全体を眺めてみると、周波数のレンジ幅が広い。

＜グラフ６＞



Bの部分を切り出してみよう。<グラフ５>との違いは明らかだ。
<グラフ７>

"accused
the Chinese
government"

5.2.2 Weak Form の習得＆徹底

次に、Weak FormあるいはWeak Vowelが、要求される場所で的確に用いられること。これを徹底させた。これにはPring（1959）をアレンジした資料を矢口は用意して利用している。たとえば、Practice Materials for Weak Formsとして、いくつものフレーズを挙げ、それぞれに存在するweak formsを意識的に弱める訓練をした。いくつか抜き出してみると、たとえば次のようなフレーズである。斜線部分がweak formsとなる。

the end *of the* week
the question *of the* hour
you *and* I
bread *and* butter
as a matter *of* fact
I sent *them a* note

さらに、一つの単語の中でも弱母音を意識させるべく、次のように単語をあげて発音させた。

*per*fect（v）	*sub*ject（v）	*pro*test（v）
*per*form	*su*ffice	*a*buse
*con*fer	*con*tribute	*sur*prise

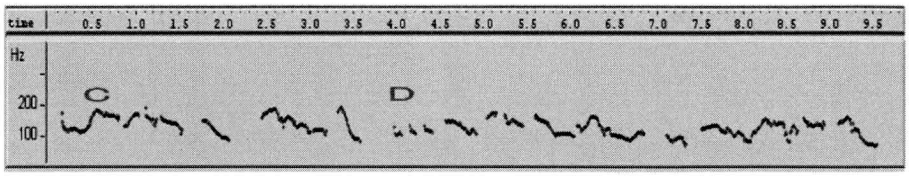
5.3 結果

以上を１対１のセッションで２時間×３回。合計６時間の訓練であったが、その結果、かなりの改善を見ることができた。２週間後、別のニュース原稿を読んだ際の基本周波数グラフである。

<文例４>

On the New York Mercantile Exchange, sell orders increased due to concern of a possible fall in oil demand amid fears of a global economic slowdown.

＜グラフ８＞



On the... sell... due to...

このグラフからわかる変化は、

・＜グラフ４＞に見られた単語ごとの小山の連続が減り、フレーズ全体が一つの山になる傾向が出ている。たとえばCの部分、「the New York Mercantile Exchange…」は当初の読みであれば＜グラフ４＞－Aのように一つ一つの単語がそれぞれ小山になっていたはずである。
・単語ごとの急激なピッチ変化が減り、全体として Intonation がなだらかに移行している。
・Intonation がワンパターンでなく、例えばDの部分「due to concern of a…」のように、挿入的なフレーズに対して、やや低いピッチから始まり、なだらかに上昇していくという変化がつき始めている。
・わずかではあるが、周波数の幅が最初に比べるとやや広く、特に、低い方に広がってきている（高い方はどちらも200Hzであるが、低い方は＜グラフ４＞では100Hzを切らなかったものが、＜グラフ８＞では切っている）。

以上のような特徴を読みとることができる。実際に音声で聞いてみた印象としては、ずいぶん英語らしくなってきた、あるいはこなれてきたというものであった。

6．まとめ

Prosody指導の重要性、「棒読み」の３パターンの分析と、それに対する指導法。さらにその中から的を絞って２点、Falling IntonationとWeak Formの徹底で、どのように読み方が変わり、「棒読み」から脱却できるのかをアナウンス訓練の実例をあげて見てきた。その指導効果については、前述のインターネット・サイトに置いた実際の音声ファイルを通して、皆さんの耳でも判断して頂きたいと思う。

さて、本稿の背景にあるのは「Prosody指導は難しくない」という筆者の思いである。「音声指導は難しい…」と仰る方は多い。筆者の学校現場での体験からも、その気持ちはよく理解できる。おそらく、文法などの指導に比べ手がかかるにもかかわらず、効果が出にくいという思いがあるのではないだろうか。だが、我々の放送現場を見れば、日々、Prosody指導が求められ、実践している。その印象は「難しくない」というものである。

例えば、我々の放送では、取材し原稿を書き終えた記者やディレクターが、自分自身でその原稿を読んでリポートをする。そしてそのリポートを放送する直前、英語の発音指導を受けるために我々のもとに来ることがよくある。オンエアのわずか数分前ということもある。一度全体を通してリポートを聞き、問題点を把握し、そして、短時間ながらその問題点のみ繰り返しトレーニングする。それで確実に音が変化していくのを我々は日々見ている。ポイントを絞れば、短時間でも確実に「棒読み」からの脱却は可能である。

要は、

1、「分析」～各個人の発音にどのようなクセがあり、何が欠けているかを最初に指導者が的確に分析することが大切である。そして、それは多くの場合、日本人が陥りやすい、共通したいくつかのパターンに分類することができ、そのための処方箋というのがある。本稿であげた3つのパターン、「ぶつ切れ読み」、「のこぎり読み」、「マシンガン読み」、そしてそれらへの対策がその例である。また、その際、本人にきちんと問題点を指摘し、意識させる。つまり「分析」内容を指導者、学習者ともに共有することも必要である。

2、「練習」～1対1で反復練習を繰り返すことが大切である。反復練習は音楽の練習に似ていると言える。楽器を練習する際、教師から1対1で、教師のモデル演奏について何度も何度も繰り返していく。Prosodyの訓練はそれと全く同じである。そして、練習のポイントは絞り込むこと。つまり一度に多くを求めないことも大切である。この2つの段階さえ踏めば、多くの場合、わずかな時間で確実に変化が起きてくるものである。前述のように、オンエアのわずか数分前でさえ変化は起きるのだから。

さて、残った課題は、このプロセスをどう一般の英語教育の中で行うかということである。その際、一番問題となる点は、「1対1」ということであろう。例えば中学校や高校、大学での通常の英語授業のように、何十人もの生徒を相手に、一斉にこうした指導を行うのは難しい。すると、授業で概略を説明し、あとは生徒達にそれぞれ録音を提出させ、それを聴いた上で個別にフィードバックするという方法が現実的かもしれない。あるいは、希望者に課外の時間で指導するといったことでも良いだろう。たとえば生徒が英語の弁論大会や暗唱大会に出たいと言い、その指導をするのであれば、理想的であろう。

そうした学校現場などでの実際の方法論については、現場の方々の工夫を待たなければならない。が、まずは日々の指導の中で、少しでもProsody指導を意識し、何か一つでも始めてみてはいかがだろうか。目に見える（耳で聞こえる？）形で、変化を直接的に感じることのできる指導分野なのだから。

*

本稿は2008年10月11日に行われた日本英語コミュニケーション学会第17回年次大会における研究発表を元に加筆、再構成したものである。なお、執筆にあたってはNHK・ＯＢであり元文教大学の矢口堅三氏、やはりNHK・ＯＢであり現在早稲田大学で教鞭を執られる大川久氏からご協力を頂いた。付して謝意を表したい。

注

1　MSN産経ニュース　2007年10月7日「福田首相は英語が苦手？　スピーチは原稿棒読み」

参考文献

貝瀬千章、古明地勝美、Ian de Stains（1979）『英語アナウンス入門』アルク
門田修平（2007）『シャドーイングと音読の科学』コスモピア株式会社
新村　出（2008）『広辞苑』第六版、岩波書店
鳥飼久美子、玉井健、染谷泰正、田中深雪、鶴田知佳子、西村友美（2003）『はじめてのシャドーイング』学研
高倉忠博（2003）『英語発音おもて・うら』新風舎
野中　泉（2005）「もっとプロソディを！」『英語教育』大修館書店、2005年12月号
松坂ヒロシ（1986）『英語音声学入門』研究社

水庭進（1998）『英語街道をゆく』茅ヶ崎出版
水庭進（1981）「Speech Errorの6章」日本大学歯学部研究紀要第9号
矢口堅三（2008）「弱形練習資料」「研修報告メモ」
ハイディ矢野（1979）『体験的イライラ英語』ジャパンタイムズ
Lenneberg, Eric H.（1967）*Biological Foundations of Language*, John Wiley & Sons
Palmer, Harold E.(1924)*English Intonation with Systematic Exercises*, Cambridge W. Heffer & Sons LTD.
Pring, Julian T.（1959）*Colloquial English Pronunciation*, Longmans, Green & Co.
Roach, Peter.（2000）*English Phonetics and Phonology*, Cambridge University Press
Wells, J. C.（2000）*Pronunciation Dictionary*, Longman
Wells, J .C.（2006）*English Intonation - An Introduction*, Cambridge University Press

本稿の図表について

・＜グラフ1＞はＰＣソフトCool Edit Pro LE（Syntrillium Software Corporation）を用いて作成した。
・＜グラフ2～8＞はＰＣソフトWaveSurfer（KTH）を用いて作成した。